特定非営利活動法人
1万人井戸端会議

日頃からのつながりが非常時の支えとなる。
地域と歩む公民館。

「1万人井戸端会議」その名前の由来は、日々のミッションに直結するものである。まず1万人とは、生活圏を意味している。子供も高齢者も自分の足で歩ける範囲。この生活していく範囲の中で、支え合ったり高め合ったりすることが持続可能な地域づくりに繋がると考えた。

また、繁多川周辺は湧き水が豊富だったため、洗濯したり飲み水を汲みに来たり、みんなが自然と集う共有の場があった。他愛もないおしゃべりや、困りごとを相談する中で知識を得て、それは誰もが持ち帰れるし、誰にでも伝えることができる。そういう開かれた学びの場を象徴するものとして、井戸端会議という語句を取り入れた。

皆で学び、よりよい地域を作っていく！
とびきりの笑顔でハイチーズ。

2014年にNPO法人1万人井戸端会議を設立。繁多川公民館の運営を通した新たな地域づくりが始まった。

先が見えない中でも豊かな暮らしを示していく、すぐりむんの功績

まずは、コロナ禍でのすぐりむん活動について紹介したい。（すぐりむんとは、豊富な知識や経験を持つ地域の人材を、優れた人として認定する取り組み。）やーぐまい（＝家こもり）生活の中、親子で作れるちらし寿司のレシピを広報誌に載せたり、地域について学びながら健康作りができるよう、YouTubeに散策の紹介動画をあげたり。公民館としては、ちょっとした声掛けと、広報誌やYouTubeというツールを提供しただけであったため、コロナ禍以前からの関係性がいきた取り組みであった。

ただ、すぐりむんを中心とした60代以上の高齢者や、中高生によるジュニアボランティアの活躍は顕著だったが、それだけではカバーできないこともあった。経済活動の見通しも暗かった中、「働き盛りの20～50代が地域での暮らしを想像できるムーブメントを起こしていかないといけない。お店の継続や、事業を発展させることができないとwithコロナ時代の地域活動は持続できなくなる。」との危機感を抱いた。

完璧じゃないから楽しい！？揚げ物喫茶へようこそ

そこで立ち上げられたのが若手会だ。まずは、顔見知りのメンバーに声をかけ30人ほどが集まった。自治会や地域の方の期待も大きく、みんなで応援しよう、若手会なんだからムラがあってもいいじゃないか、という機運が高まっていった。

この取組みの1つに「揚げ物喫茶」がある。油の卸売をしている若手会のメンバーが手を上げ、油を販売しつつ、食材を持ってきたら無料で何でも揚げますよ、とい

カテゴリー	健康・福祉／観光・地域交流
住　所	那覇市繁多川4-1-38
電話番号	098-917-3448　設 立　2014年　人 数　14名
主な活動	那覇市繁多川公民館指定管理事業、いどばた学童クラブ運営事業など
受賞歴	文部科学省優良公民館（2回受賞）、優良公民館相互評価特別賞 2020年度第8回全国公民館報コンクール銀賞

う仕立てだ。喫茶だから昭和歌謡曲を流します、飲み物は用意できないので自動販売機で買って下さい、と多少粗い企画のイベントだったが、近くの園児が30名ほど遊びにきたり、通りすがりの方も立ち寄ったりで、想像以上に多様な世代の人が集まった。

なお、社会教育法には「もっぱら営利を目的とした事業」は禁止とあるが、孤立を防ぐ・集いをやめない、という主目的があったため、公民館としては問題ないと判断した。結果、若手メンバーの自主的な地域活動の実践につながったのだ。まずは始めることが大事、足りない部分はやりながら修正していく。そのほうが地域のみんなで作り上げる楽しさがあるのだろう。

揚げ物喫茶・店長。
「美味しい油でカラッと揚げます！」

地域の声を拾う、拾えない声にも耳を傾ける

また、コロナ禍では「地域の人の声（困りごと）を拾いに行く」ということにも力点を置き、地域包括支援センターとも連携し、来館する人にヒアリングをかけていった。生活リズムが崩れた、孤独を感じた、認知症がすすんだ…など、世代・男女別に整理して張り出し、みんなの困りごとを見える化した。

公民館としては、拾えた声や拾えなかった声からも推測して講座を組み立て、次の事業の展開に生かすということをした。そのような活動は、常日頃から地域を思い、一緒に活動してきた基盤があったからこそ実現できたことだった。役に立ちたいという気持ちで色んな人と関わる中で、地域をよくするための学びやきっかけが作られていく。こうして地域としての力を高めていくことが、長い目で見ると大切になってくるはずだ。

希望を持てる地域社会を目指して

自分たちの住んでいる沖縄に、もっと希望を持てる子育て環境を作ることが今後の課題だという。別で運営している井戸端学童等の取り組みもあり、このあたりの小学生とはお互い顔が分かった上でのコミュニケーションが取れるが、できればもっと前の段階からこういった関係性を築いておきたい。例えば出産後～保育園に入れるまでの期間。ここで孤立してしまうケースも多く、公民館としての接点もまだ十分ではない。今回のコロナ禍でも突きつけられたが、一気に生活が変わってしまうリスクは今後もはらんでいる。「そんな中にあっても、希望を捨てず自分への期待さえ持つことができれば、力に変えていけると思う。チャレンジしたいという子供たちの可能性を広げることができるよう、これからも地域一丸となって邁進していきたい。」館長の南さんは笑顔で語ってくれた。